

音楽学部教職課程履修学生に対するピアノ教育の取り組み
— 応用音楽学科における実践報告 —

A Report on Piano Pedagogy in Teacher Training for Students
of the Department of Applied Music

今城 道子，一ノ瀬 智子，松本 佳久子
岩谷 寿美子，松川 南海，山本 麻代，竹原 直美

IMASHIRO Michiko, ICHINOSE Tomoko, MATSUMOTO Kakuko
IWATANI Sumiko, MATSUKAWA Nami, YAMAMOTO Mayo, TAKEHARA Naomi

武庫川女子大学 学校教育センター年報

第2号 2017年

【実践報告】

音楽学部教職課程履修学生に対するピアノ教育の取り組み
—応用音楽学科における実践報告—

A Report on Piano Pedagogy in Teacher Training for Students
of the Department of Applied Music

今城道子* 一ノ瀬智子** 松本佳久子**
岩谷寿美子*** 松川南海*** 山本麻代*** 竹原直美****

IMASHIRO, Michiko ICHINOSE, Tomoko MATSUMOTO, Kakuko
IWATANI, Sumiko MATSUKAWA, Nami YAMAMOTO, Mayo TAKEHARA, Naomi

キーワード：ピアノ 教職課程 音楽

1. 研究の背景

音楽科教員養成のピアノ教育において、音楽経験年数や内容が様々である学生の習熟度の幅広さやそれに伴う多様なニーズに即した学習支援のあり方が共通の課題となっている。

教員養成課程並びに保育における取り組みの先行研究としては、今井 (2013) ^①、小野 (2012) ^②、荻田 (2012) ^③、東 (2012) ^④などが挙げられ、大学入学までの音楽学習経験が学生間で差が大きいことが課題として指摘されている。また、今井 (2013) ^①は、学生と指導者間における学習到達目標の共有が必要であるものの現状としては両者の間にギャップがあり、特にピアノをはじめとする実技科目は、自主学習意欲に繋がる動機付けや、個々の習熟度に即した課題設定など幅広い学習支援が必要であると述べている。これらの課題は、音楽学部の教員養成を鑑みても同様の問題があると言える。教育現場において伴奏楽器として最も必要とされるピアノ実技科目で早急に取り組まなければならない課題である。

教員採用全体における募集定員と競争率は、年々激化の一途を辿ってきたが、団塊の世代の退職に伴い、一時のピークを過ぎて落ち着きつつあると言われている。しかし、音楽など芸術科目の教員採用数は他の科目と比べて、かねてから採用予定数が少ないことに加え、少子化に伴い、音楽が選択科目となる高校の音楽科教員採用状況なども一層厳しい現状にある (文部科学省 2016) ^⑤。したがって、他校種の免許や、さらには他職種の資格取得を目指す学生もおり、本学音楽学部応用音楽学科では、平成 21 年開設当時から、いくつかの資格を重複して取得しようとする者が、毎年のように見受けられる。特に当応用音楽学科においては、日本音楽療法学会認定音楽療法士 (補) の受験資格を取得できる認定校であることから、教員免許と同時に音楽療法を専修する学生もいるため、ピアノ教育科目における授業へのニーズは、より一層幅広くなっていると考えられる。

そこで、本研究では、アンケート調査を通じて、本学における音楽教員養成に向けたピアノ実技科目に対する学生のニーズ並びに音楽経験などの現状や傾向について把握し、学習支援のあり方を検討する。

* 応用音楽学科教授 ** 応用音楽学科准教授 *** 応用音楽学科非常勤講師 **** 応用音楽学科助教

2. 調査方法

(1) 実施期間

平成 28 年 9 月～10 月の 1 ヶ月間アンケートを実施した。

(2) 対象

調査期間時点で、応用音楽学科に在籍し通学する全学年の学生（調査当時 82 名）を対象とした。

(3) 内容

今井（2013）による調査項目に基づき、さらに音楽科教員養成や音楽療法士（補）受験資格取得などを網羅する本学の授業到達目標と照らして、変更を加えた。

質問項目は、全部で 19 項目あり、学生が目指す職種に関する意識、ピアノ学習の実態、ピアノ練習に対する意識の 3 分類から成る。各質問項目の内容は下記の通りである。

①学生が目指す職種に関する意識（問 1～5）

- ・取得を目指す資格・免許・職種について（4 項目から複数回答，その他自由記述を含む）
- ・希望職種に対するピアノ実技の必要性に関する認識（4 件法）
- ・ピアノ技術を必要と考えた理由（5 項目から複数回答，その他自由記述を含む）
- ・現在まで入学当初の希望職種は同じか否か／その理由について（2 択／12 項目より複数回答，その他自由記述を含む）

②ピアノ学習の実態（問 6～13）

②-1 入学前について

- ・大学入学前のピアノ経験の有無（2 択）
- ・ピアノの学習環境（3 項目から選択，その他自由記述を含む）
- ・ピアノレッスンの頻度（4 項目から選択，その他自由記述を含む）
- ・ピアノを習っていた理由（5 項目から複数回答，その他自由記述を含む）

②-2 入学後について

- ・ピアノの自主学習の程度（5 件法）
- ・ピアノの自主学習の頻度（7 項目より選択，その他自由記述含む）
- ・練習時間について（6 項目より選択，その他自由記述を含む）
- ・練習への満足度について（5 件法）
- ・主観的な到達度について（5 件法）
- ・熱心に練習するようになったか否か（3 項目より選択）

③ピアノ練習に対する意識（問 14～19）

- ・熱心に練習するようになった理由（19 項目より 5 つを選択，その他自由記述を含む）
- ・熱心に練習しなかった理由（15 項目より 5 つを選択，その他自由記述を含む）
- ・どのようにすれば，今よりピアノの練習が充実すると思うか（自由記述）
- ・ピアノが上達したと感じるのはどのような時か（9 項目より 4 つを選択，その他自由記述を含む）
- ・「ピアノが上手」とはどのような状態か（自由記述）
- ・今より努力してピアノが上手になりたいか（3 項目より選択）

(4) 手続き

授業時に配付し、当日または後日、回答を回収した（留置法）。

(5) ピアノ実技に関する入学試験課題と卒業要件について

応用音楽学科の入試における実技課題曲の内容と、ピアノ実技科目の開講時期、履修要件は次の通りである。

<実技課題曲>

応用音楽学科の入試案内には、“J. S. Bach, F. J. Haydn, W. A. Mozart, L. v. Beethoven, F. Schubert, F. Mendelssohn, R. Schumann, F. Chopin, F. Liszt, J. Brahms, C. Debussy, M. Ravel の作曲家の作品の中から CZERNY30 番以上のレベルに準じた楽曲を任意に選曲し（1～数曲。同一作曲家の作品でなくても可）、最後まで演奏してください（合計3分以上）”と明示している。このように、入学前時点においては、CZERNY30 番練習曲以上は到達していることを条件としている。

<ピアノ実技科目>

開講科目は、下記の通りである。

ピアノ実技ⅠA, ⅠB（1年次 前・後期開講, 必修科目）

ピアノ実技ⅡA, ⅡB（2年次 前・後期開講, 必修科目）

ピアノ実技ⅢA, ⅢB（3年次 前・後期開講, 選択科目）

ピアノ実技ⅣA, ⅣB（4年次 前・後期開講, 選択科目）

ピアノ実技科目は、1回 45 分の個人レッスンを行っており、現在は専任教員 3 名と非常勤教員 3 名が担当している。授業終了後、試験期間中に実技試験を行うが、それぞれの課題曲は、学生個々の到達度に応じてツェルニー 30 番練習曲以上から様々なレベルにわたるよう設定している。

(6) 取得可能な資格について

応用音楽学科を卒業時に取得可能な資格は、下記の通りである。

- ・中学校教諭一種免許状（音楽）
- ・高等学校教諭一種免許状（音楽）
- ・図書館司書
- ・音楽療法士（補）受験資格
- ・生涯学習音楽指導員（C 級）（学科で学んだことが資格取得の講習会受講時に役立つ）

3. 結果

(1) 回収率

全学年の学生数 82 名に対し、回答があったのは、65 名であり、回収率は 79.3%であった。

(2) 結果

①問1 目指す職種

目指す職種を全学年的に見ると、音楽療法士が最も多く（61.5%）、次いで中高教諭が多かった（33.8%）。この傾向は、学年別にみてもほぼ同様の傾向である（図1）。

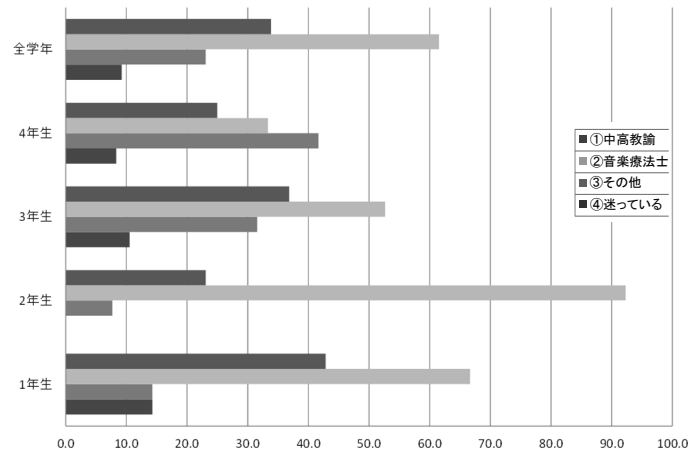


図1 目指す職種 (%)

②問2 ピアノ技術習得の必要性について

全学年としてみると、「必要である」「ある程度必要である」と答えたのは91%にのぼり、ほとんどの学生が技術習得の必要性を感じている(図2)。

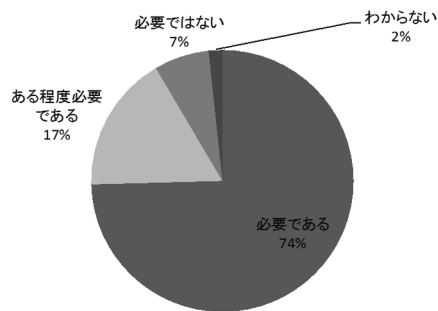


図2 ピアノの技術の必要性(全学年)

③問3 ピアノの技術が必要な理由

問2で答えた理由について、各学年ともに「現場で教育や臨床の一つとして必要である」が多く、さらに4年生では「教員採用試験や就職試験で必要と考えている」が並び、教員免許や音楽療法士を目指す学生の中で、教育実習や音楽療法実習を通じて意識が高まったものと考えられる(図3)。さらに、教職を目指している学生と、それ以外の学生の回答を比較したところ、教職を目指している学生において「教員採用が試験や就職試験で必要と考えている」との回答が多かった。このことから、教職課程を履修している学生の、ピアノ技術の必要性への意識の高さが窺える。

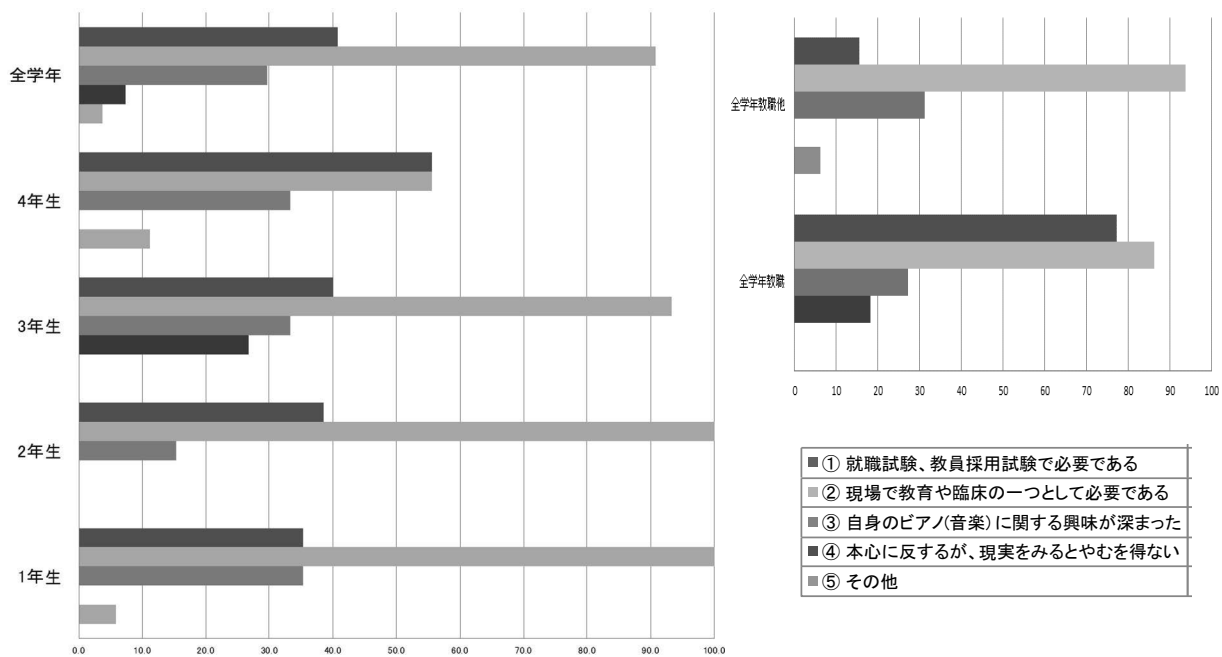


図3 ピアノの技術が必要な理由(学年別/教職志望者とその他) (%)

④問4・5 入学当初に目指していた職種と同じか、またその理由について

入学当初に目指していた職種と同じかどうかは、全学年で「はい」が83%を占めていた(図4)。

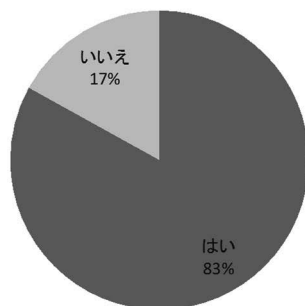


図4 入学当初に目指していた職種と同じか(全学年)

⑤問6・7 入学前のピアノの学習経験とその理由について(全学年)(図5~8)

概ね「ピアノ学習経験あり」の学生が多く、個人レッスンや音楽教室に通っていた者が大半を占めていた。これは、当学科の入学試験の実技試験課題があることから、受験者にピアノ学習経験者が大半であり、さらに学習継続の理由として、ピアノに対する興味が高いことが示されている。

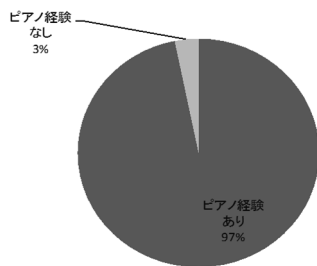


図5 ピアノを習った経験

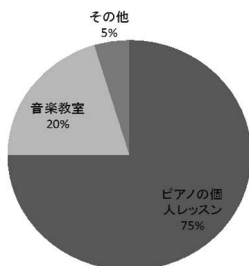


図6 ピアノを習った環境

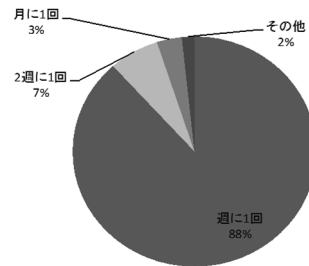


図7 ピアノレッスンの頻度

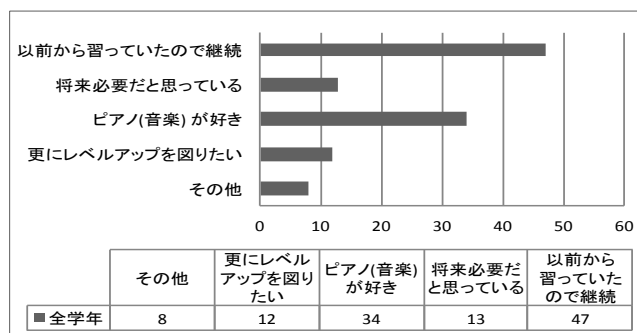


図8 ピアノを習っていた理由(人数)

⑥問8～12 現在のピアノ自主学習状況について (図9～13)

ピアノの自主学習に対する自己評価は、学年全体で、「大変よく練習した」「少し練習した」を合わせると54%となり、練習の頻度も「毎日」「週に4～5日」を合わせると58%である。また、練習時間については、「1～2時間程度」が51%と最も多く、次いで「30分～1時間程度」が34%となっている。

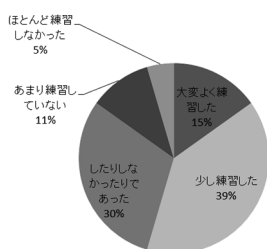


図9 練習の程度

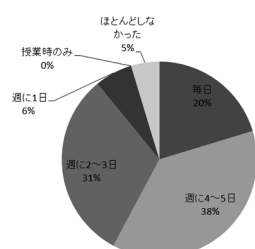


図10 練習の頻度

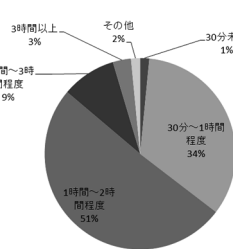


図11 練習時間

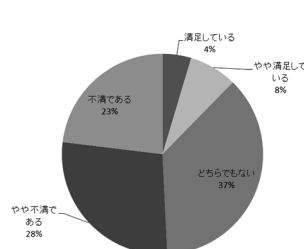


図12 練習量への満足度

これらの練習量に対する満足度は、「不満である」「やや不満である」が合わせて51%となっており(図12)、「満足している」「やや満足している」を合わせた12%と比べて高く、現状に対して問題を感じていることがわかる。

問12の到達度については、「ずい分上達した」「少し上達した」が、全学年では合わせて42%であり、「あまり上達していない」「昨年より下手になった」を合わせた32%を若干上回っている(図13)。学年別にみると、特に4年生の自己評価が高くなっている。これは、選択科目になり、卒業学年にお

いても履修している者は、動機づけが高いことが示されている。

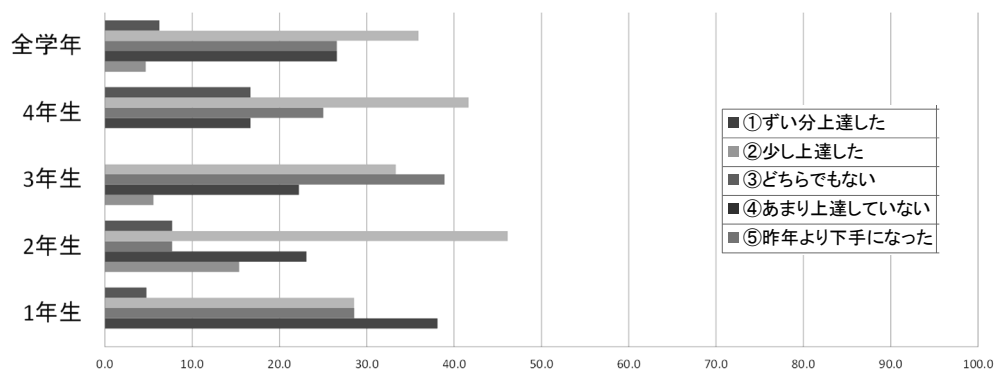


図 13 ピアノ実技の到達度 (%)

⑦問 13～16 熱心にピアノを練習するようになった（ならなかった）と、その理由（図 14～16）

全学年では、熱心に練習するようになったかどうかについて、「はい」が 59%と、「いいえ」の 26%を上回っている（図 14）。

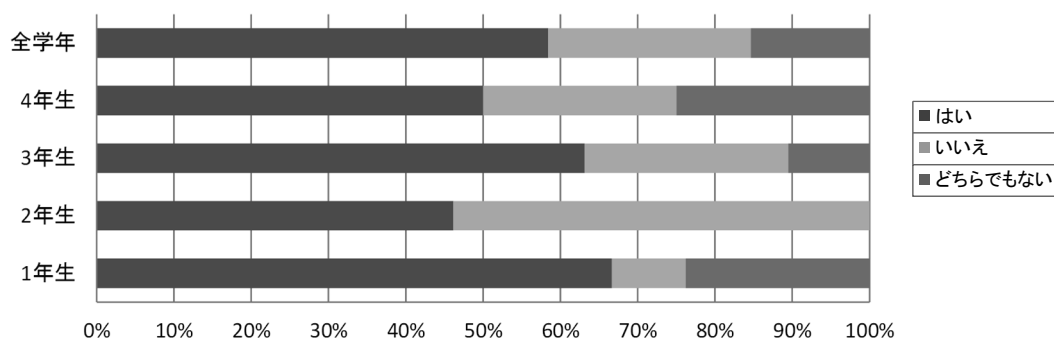


図 14 熱心に練習するようになったか

また、その理由としては、「ピアノの実技試験があった」「ピアノを弾くことが面白くなった」「教員・音楽療法士を目指す者としての意識の向上」が上位を占めている（図 15）。教職志望者とその他の学生とに分けると、教職志望学生は、とりわけ「教員・音楽療法士を目指す者としての意識の向上」が、教職その他学生の回答の割合を倍近く上回っている。「ピアノの実技試験」については、その他学生の割合が多くなっている。

一方、熱心に練習できなくなった理由としては、「時間がない」「ピアノの練習が嫌い」「楽譜を読むことに困難を感じる」が挙げられる（図 16）。教職志望者とその他の学生とに分けると、教職志望学生の特徴は、「練習が嫌い」「楽譜を読むことに困難を感じる」の回答の割合がその他の学生よりも高くなっており、これは初学者にとって、教職課程の水準の高さがプレッシャーになっていると考えられる。

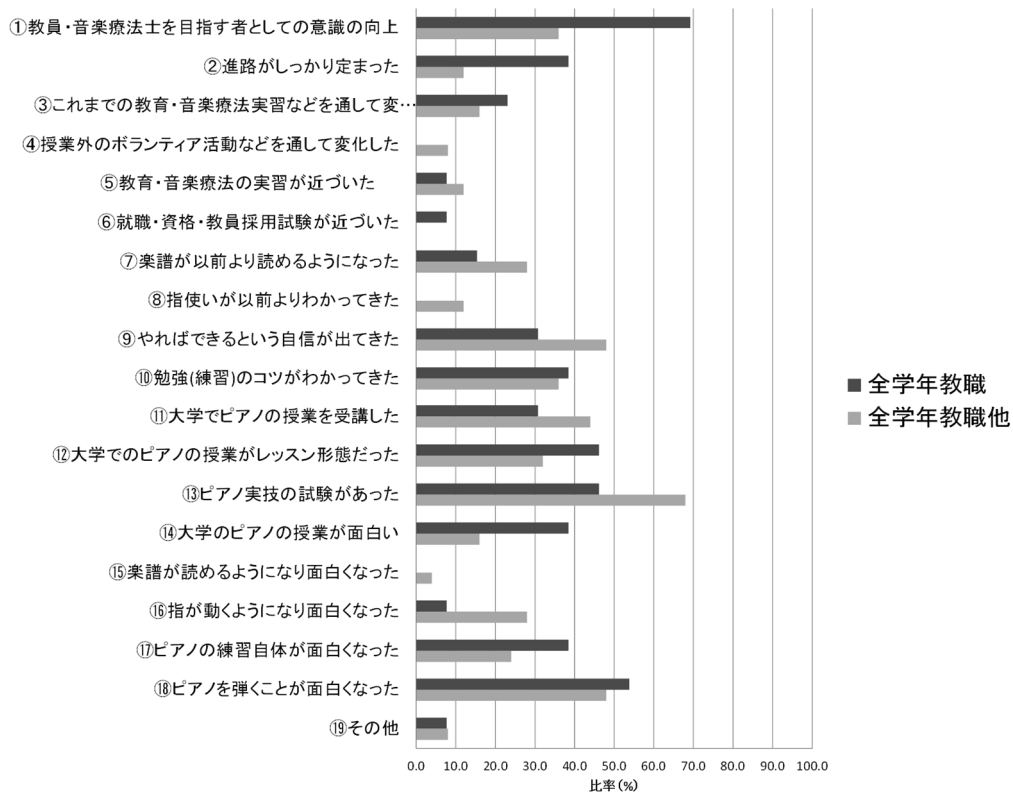


図 15 熱心に練習する理由(教職志望者とその他)

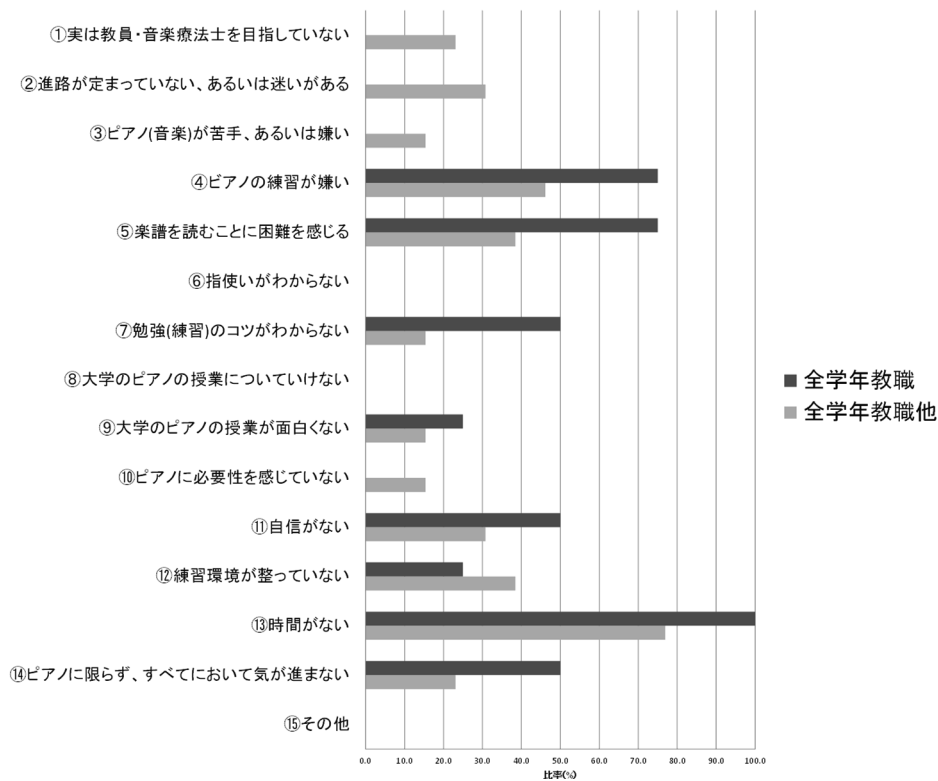


図 16 熱心に練習しない理由(教職志望者とその他)

問 16 の「どうしたら今よりピアノの練習が充実すると思うか」の自由記述をみると、「アルバイトの時間を減らして練習する」や「日常生活のリズム」「練習時間を増やす」などが比較的多く挙げられている。

以上のことから、読譜力など技能的問題により動機が低くなっていることや、授業時間・アルバイトのために練習時間の確保がままならないことを、学生自身が問題に感じていることがわかる。

⑧問 17～19 ピアノの上達について (図 17)

「誰かに褒められたり、上達したと言われた時」「止まらずに弾けるようになった時」「速く弾けるようになった時」が多く、他者からの評価や具体的に変化が認められた際に、上達したという実感が得られるのではないかと考える。

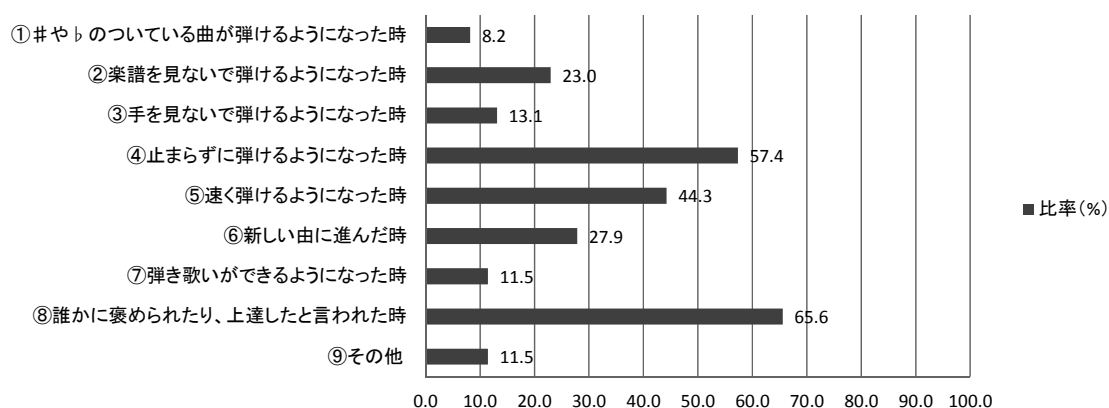


図 17 ピアノが上達したと感じる時(全学年)

問 18 の「ピアノが上手とは？」の質問に対する自由記述回答を見ると、「間違わずに弾ける」「指が速くまわっている時」といった技術面 (9 件/59 件) よりも、むしろ表現力の向上に対する記述が多くなっていった 26 件/59 件)。このことは、各学年の科目目的並びに到達目標として掲げている「音楽的表現力」「音楽性を養う」「情感豊かな演奏」などにも合致しているものである。

問 19 の「今より努力してピアノが上手になりたいか」では、図 18 のように、95%と大半の学生が努力して上達したいという意欲を持っている。

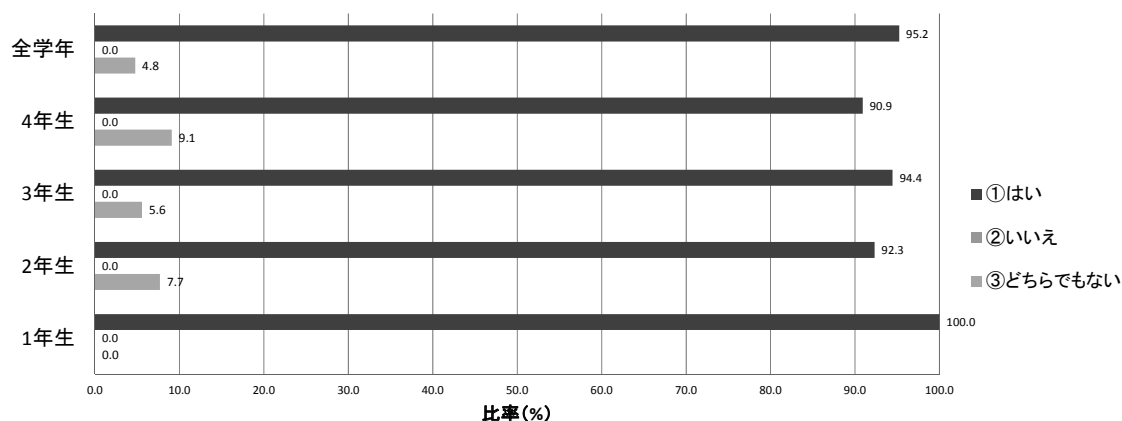


図 18 今より努力してピアノが上手になりたいか

4. 研究のまとめと今後の課題

ピアノ実技科目における到達目標は認識できており、上達に対する意欲はあるものの、時間の制約や、モチベーションの維持など現状に満足できていないという当学科の学生の実態を示した。そのなかでも、教職を目指す学生は、教職採用試験という具体的な目標に即して、ピアノ技術の必要性を強く認識しており、そのことがより熱心に練習に取り組む姿勢につながっている傾向が見られた。

練習時間の少なさや、読譜に悩む学生がいる点において、小野^②と同様の結果が得られ、また実技試験など人前で演奏する機会が自主学習への動機付けにつながっていることも今井^①の結果と共通している。

その一方でピアノに苦手意識のある教職志望学生に対しては、モチベーションを上げ、練習の習慣化を促進するためのきめ細やかなサポートが必要であると考えられる。そのためには、具体的に上達への変化が感じられるスモールステップにより課題を提示することで、自他共に上達が認められ、さらにはピアノによる表現の面白さを実感できるよう配慮することが重要である。これらのことは、本研究のピアノの上達に関する質問項目の結果において表されており、東^④の先行研究の、「できる」という実感を持たせることの重要性と合致している。ただし、それと同時に、大学の教員養成課程としての最終到達ラインを維持していく必要があることも忘れてはならない。

今後は、他の音楽の基礎科目と連動しながら、総合的に音楽能力を向上させることが、不可欠である。したがって、ピアノ実技科目の到達目標を、各関連科目と連動できるよう精査し、その目標に向かう具体的な手立てとなる指導方法をさらに工夫し、検討していく必要がある。

引用文献

- (1) 今井由恵「保育者・教育者養成におけるピアノ学習に対する意識変容に関する調査と分析」『北海道文教大学論集』14, 2013, pp. 97-112
- (2) 小野由恵「保育者・教育者養成におけるピアノ学習の実態調査に基づく学習支援の課題」『北海道文教大学論集』13, 2012, pp. 83-96
- (3) 荻田泉「幼児・初等教育の指導者養成におけるピアノ指導法の研究：初心者の学習意欲を高める教授法について」『四天王寺大学紀要』53, 2012, pp. 215-232
- (4) 東卓治「教員養成課程におけるピアノ教育の現状と課題：入学前の音楽経験との関連性に着目して」『関東学院大学人間環境学会紀要』17, 2012, pp. 35-46
- (5) 文部科学省「教科別志願者数、受験者数、採用者数：平成27年度公立学校教員採用選考試験の実施状況について」(2016年10月31日閲覧)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkou/_icsFiles/afieldfile/2016/02/03/1366695_01.pdf